



『この鎌』 川崎先達 撮影



平成4年7月

第17号  
年2回発行  
発集発行

広島県安芸郡府中町  
茂陰2丁目2-8-10  
真言宗 正銀寺

小出真行

悪いことをしなければ苦しむことなく  
善いことをすれば楽を得る

秘藏宝鑑

### 「精進料理」

肉のない野菜だけの料理のことを「精進料理」といいます。ですから、なんだか「精進」は「菜食主義」の別名みたいに感じますが、もともとはそんな意味ではありません。「精進」というのは「勇気」とか「勇者の心ばえ」を原義とし、「勇猛心」とも漢訳されますことから、仏教では、「決然として一心不乱に心道にはげむこと」を意味します。

もともと、お坊さんと在俗の信者さんが特定の日に集まって、仏教の理解を深め、信心のほどを確認しあう習慣がありまして、その日は「精進日」と呼ばれていました。

この日は、不殺戒をはじめとする重要な戒律をきちんと守る日でもあったため、出される料理に肉のたぐいは一切入りませんでした。従いまして精進日の料理は菜食料理、そこから、精進料理は菜食料理の別名になつたということです。

## 「靈峰石鎚山」

開西第一の高峰、靈峰石鎚山（一九八二m）は、一千三百年前、役の行者（役小角）によって開山されました。この「役小角」は、舒明天皇の頃（六二九～六四二）大和国に生まれ、山にこもって修行を重ね、加持・祈祷をおこなう修驗道の開祖といわれ、富士山をはじめとし、日本各地の靈山を開いたとされています。

その後、寂仙菩薩が石鎚藏王大権現を称えて深く信仰し、山路を切り開き、登山者を導き、常住社（今の中元宮、成就社）を創立しました。それから上仙大師、光定大師等の高僧が、四国八十八ヶ所第六十番札所横峰寺、六十四番札所前神寺を創立し、石鎚神社の別当寺（神社に付属して創立され、社務をたずさわる寺院）となり、明治を迎えたが、明治天皇の大命により、神仙混淆が禁止され別当寺は廃止となり、純粹は神社と定められたのです。

さて、この石鎚神社でお祀りされております神様は「石鎚毘古命（いしづちひこのみこと）」又は「石鎚大神」と称し、天照大御神をお産みになつた。伊邪那岐の命、伊邪那美の命の第二子にあたり御祭神は、「石鎚毘古命」だけですが、三つの御神徳

を表すため、三体の御神像をお祀りしています。その三体とは

玉持の御神像……（和魂・にぎみたま）

仁の御神徳を表し、  
家内安全・病氣治癒

をまもります。

かがみもち  
鏡持の御神像……（奇魂・くしみたま）

智の御神徳を表し、  
農業、工業、商業、漁業の繁栄を家業の成就をまもります。

かがみもち  
剣持の御神像……（荒魂・あらみたま）

勇の御神徳を表し、  
勇気、忍耐すすめ、  
悪市を除き、危機からまもります。

この三体の御神像が、毎年六月三十日早晨、本社で出御祭が斎行され、三基の神輿に御動座され（赤い神輿に「仁」、青い神輿に「智」黄には「勇」の御神像が奉載）石鎚山麓の里々で御旅行祭を斎行しつつ成

就社へ向かいます。翌七月一日午前七時、信徒の背により「仁」、「智」、「勇」の順に頂上社へ御動座され、十日間の大祭の幕が切って落とされます。そして、七月十日午前十時、四社（口之宮本社・中之宮成就社・中之宮土小屋遙拝殿・奥之宮頂上社）

同時に終了祭が斎行され、同日御神像は、成就社まで御下向、翌十一日正午本社へ御還宮になり夏季大祭が終了致します。なおこの十日間になんと約十万人の信者の方々が登拝するということです。

## 「石鎚山参拝」

正観寺の恒例行事として定着しました「石鎚山参拝」

は七月二～三日にかけ、総勢五十一名の参加を募り、バス二台（一



号車に橋本・大西・川崎先達、二号車には、難波・木村・田村先達が乗り込み）に便乗し、曇り空の中を午前六時に広島を出発しました。

バスの中でまず、参拝者の道中安全、家内安全を祈念すべく、般若心経を読誦し、続いて自己紹介やガイドさんの案内に耳を傾けながら竹原港へ向かいました。これよりフェリーにて一時間二十分の船旅をしますとそこはもう四国の波方港。下船し、今治市内を通り小松市を目指し、

第一の目的地である四国靈場の香園寺に到着、この香園寺には、安産、子授けの御利益が得られる「子安大師」は、有名で、本堂には、可愛らしい子供の写真がところせましと飾られ、全国津々浦々より訪れる方が絶えないそうです。ここで簡単にお勤めを済ませ、すぐその足で、第二の目的地、石鎚本社にての御神像拝載、でも、別の団体が先に本殿に入っているため待つこと一時間足らず、この間、前神寺へ参拝する方、くつろいで神礼授与所で石鎚山のビデオを観る方など……。やっと御神像の拝載、先達さんの協力を得て各自に御神像の御徳をいただくべくお加持を次々に（この御神像は、本社・成就社・頂上社の順にずっと重くなっています。）していきますと、頭から汗が吹き出ますが、これは心地よい汗です。

拝載が終ると石鎚温泉で昼食をとり、第三の目的地極楽寺へ向かいました。極楽寺では運よく待ち時間もなくスムーズに石鎚大権現の御神像を開帳していただき、内護摩にて各家の祈願、そして住職の有難い講話（この住職の講話は好評で、以前聞いた話のなかでいつか花開く等は特に印象に残っています）を聞き、身も心もリフレッシュした気持で極楽寺をあとにしました。

エーで中復まで上りますが、昔はここを徒歩で登ったそうですが、大変さが想像できます。ロープウェーを降り前神寺の奥の院にお参りをし、歩くこと二十分位で本日の最終目的地、成就社に到着。玉屋旅館で一息つき、拝殿で本社より一回り大きな御神像を拝載させていただき、再度、汗を拭き拭きお加持をし、夕食、入浴を済ませ明日は早いので床につきましたが、どの方も興奮しているせいかなか寝つけず、やつとうとうとしたかと思うと突然

「もう四時だ！」

の声

あわてて、眠い目をこすりこすり時計に目をやると、なんと十二時二十分、どうやら長針と短針の見間違いらしく爆笑、そのお陰かりラックスして熟睡ができた様に思えます。

朝四時には、ほとんどの人がごそごそ起きて身支度をし（いつも朝は、風の「ゴー」という音で目を覚ましますが、天気はいたって穏やかなので一安心）朝食をすませ、五時の開門が近づくにつれ多くの団体がいまやおそじと順番まち。

午前五時、鐘の音とともに開門、頂上に向かう長い帯が薄暗い中をゆっくり進み出

登山口より傾斜をはうようにロープ・ウエーで中復まで上りますが、昔はここを徒歩で登ったそうですが、大変さが想像できます。ロープウェーを降り前神寺の奥の院にお参りをし、歩くこと二十分位で本日の最終目的地、成就社に到着。玉屋旅館で一息つき、拝殿で本社より一回り大きな御神像を拝載させていただき、再度、汗を拭き拭きお加持をし、夕食、入浴を済ませ明日は早いので床につきましたが、どの方も興奮しているせいかなか寝つけず、やつとうとうとしたかと思うと突然

し、途中、遙拝所（鳥居）でのとりまとめを、難波、橋本先達にお願いし、元気よく曲がりくねった急勾配の道を

「ナンマイダー」「ナンマイダー」

と唱えながら、中間点の茶屋を目指し、心藏破りの坂を登ります。今年は少し振りの御来光を期待しましたが、あいにくお目にかかることはできませんでした。なにぶん私が帰広して十二回目の参拝の中で御来光に出会えたのはたったの二回だけ、やはり梅雨時期の大祭ですので、雨はつきものを感じがします。晴天、雨天の時は発汗作用で体力を消耗しますので、曇天で霧雨状態が登りやすい感じがします。試しの鎖（上り四十八メートル、下り十九メートル）の行場の前を通り一時間程で茶屋に到着、少し休憩をし、再び登りはじめると、待望の一の鎖（三十三メートル）が見えはじめ、急に足取りも軽くなったり持になりますのは不思議です。二の鎖（六十五メートル）。三の鎖（六十八メートル）を登り切るとそこは展望が開けた頂上社となります。鎖を登るには少々足に自信がないとおすすめしかねます。といいますのも、膝にかなりの力を用し、下山の時までにダメージを受けたからです。したがって少し年配の方は鎖のない登拝道を登ります。

約二時間少々で頂上社に到着し、まずは山頂にて御神像を拝載し雲海を見下しながら胸一杯新鮮な空気を吹き込みます。その後、格別な「あめ湯」で喉をうるおし、一息つき、靈水（御神水）をリュックに詰め下山の準備をしますが、数量を多くすると肩にずっしり重くのしかかります。

「よっこらしょ。」

と気合いを入れリュックを背負い一步一步用心しながら下っていきますが、やはり徐々に背中の荷が重く感じますので登りよりも下りの方が大変です。「行きはよいよい、帰りはこわい」の歌詞ではありますね。

登りに力を使い果たすと、膝がガクガクわらって力がなかなかはいりません。おそらく皆様のなかにはその様な経験を味わった方も少なくないのでしょうね。

快調に下りはじめ、出発点の成就社に目標の十時までには余裕をもって全員無事到

着しました。あとは、少し歩きロープウェーで登山口に降りるだけ、その頃には天候もよくなり、少し蒸し暑さを感じる様になりましたが、一つの目的を達成した皆さん

の顔はどことなく輝いて見えます。

ところで、この石鎚山での登り下りは、「お上りさん」「お下りさん」と掛け声を出しあって行き交いをしますが、下山の時に「お上りさん」と言う言葉はなかなかい

いもので思わず笑みがこぼれてしまいりますよね。

途中、石鎚温泉で昼食をとり、風呂で汗を流し午後七時前には帰広し、二日間の石鎚山参拝も無事成就し、幕を閉じました。この間、労をとつていただいた。難波・橋本・木村・田村・大西・川崎諸先達には本当に世話になり感謝に堪えません。厚く御礼申し上げます。

「呼び方はいろいろ？」

インドにおいて、仏教やジャイナ教の修行者が居住しています場所を「ヴィハーラ」と呼び、漢訳仏典によりますと、この「ヴィハーラ」は、「寺舎」・「僧坊」と訳してあります。この「ヴィハーラ」の中に、それぞれの修行者が生活する小さな部屋「ラヤナ」があります。現在、インドのナランダには、その者、玄奘三蔵が中国からシルクロードを通り、ここに来て学んだといわれていますナーランダ大学の跡に、一坪くらいの広さの「ラヤナ」がずらっと並んでいます。この「ラヤナ」ですが漢訳仏典によりますと、「房舎」・「房」と訳され、いわば刑務所の独房に似たものだとお考え下さい。但し、入口や窓には鉄格子は付いていませんのでお間違いない様に……。

わが国では、大きな寺院にあって僧侶が起居する室を「房」と呼び、その「房」の主を「房主」（ぼうず）と呼んでいました

が、いつの頃からか「房」が「坊」にとりかえられ、「房主」が「坊主」と呼ばれるようになりました。でも最初は、小さな部屋であります「房」よりも、もっと大きな場所に居住しています僧を「坊主」と呼んでいたらしいのですから、「坊主」という呼び方は起源的に申しますと決して軽蔑ではありません。しかし現在では「坊主」と呼べば完全に蔑称として使われているようです。

「坊さん」・「お寺さん」・「住職さん」といった呼び方が一般的で親しみをおぼえる呼び方ですが、真言宗・浄土宗・淨土真宗では「院主」・「院家」といった呼び方もあります。この「院」とは「別院」の意で、大きなお寺の自分専用の別院を持ち、そこに居住していることを意味しますし、禅宗においては、住職の居住する場所を「方丈」といいますので、「方丈さん」といった呼称が使われています。そのほか一山の主でありますところから「山主さん」といった呼称も使われていますが、特に位の高い僧侶ともなると（管長クラスの高徳な僧）「猊下」を用います。この「猊」とは「獅子」の意があり、仏のすわる座を獅子座と呼びましたところから高僧がすわる座を「猊座」と名付け、「猊下」という呼び方ができました。また、法然上人のように「お上人さま」といった敬称もありますが、あまり若い僧侶に対しても適さず、年輩の僧侶に対してのみ使われる敬称です。

皆さんには、どうお呼びしますか？